

# 『心を一つに奇跡を抱いて』

—天高く猫眠る星シリーズ3—

## 第一章 「幸運を呼ぶ男」

今日はどういう訳だか朝から忙しくって、本当なら局長に呼ばれているんだけどとても行けるような状態じゃない。サイボーグ学会のレポートも提出しなきゃなんないし、たまらないよ。

「たっちゃん、ちょっとお！」

「ほーい」

また、シモさんか…。なんか、最近新しい推進装置を開発しているとかで、やたらと人使いが荒くって困る。

「たっちゃん、悪いんだけどさ。資材課に行って、このリストにある物を捜してきて欲しいんだけど。もし、なかったら、どうしようかなあ…。あ、その時は連絡してくれればいいや。」

「シモさあーん、今日は忙しいから、手伝えないって言ったでしょうが。」

「あれ、そうだったっけ？」

「そうです。とにかく、今日は駄目だから、他の人に頼んで下さいよ。」

俺はそう言い放つと自分の仕事に戻ろうと行きかけた。

「でも元々このプロジェクトは、たっちゃんが手伝うという約束で始めたんじゃないか。」

「そりゃ、そうだけどお…。」

駄目だ…。シモさんがこういう言い方をし始めた時は、おとなしく言うこときいておかないと後がうるさい。

「分かりましたよ、行ってきますよ。リストを貸して下さい。」

「そうこなくっちゃ、じゃこれ、頼むんだよ。」

あ…。リストだけ置いて、さっさか行っちまいやんの。ま、いいか。どうせそろそろ一息入れるつもりだったし…。

手近の人間に資材課に行ってくると声をかけると、連中はみんな苦笑いをしている。科学部の誰もが室長であるシモさんの我が侘には諦めているんだ。

科学部を出て、エレベーターを使って地下2階まで降りる。普段滅多なことでは使わない倉庫がここ地下2階にあって、ここに来ればたいがいのパーツは揃うと言われている。

「こんにちは…。」

オフィスに顔を出すと、電気はついているんだけど誰も人がいない。ひょっとして上に寄るべきだったかな。少なくとも地下1階の方なら絶対に誰かいるはずだし…。

「ん…？」

いや、誰かいる。奥の方でガタガタと物を動かす音がしている。

「こんにちはあ、誰かいますかあ。」

暫く物音が続いて、やがて音の主が姿を現す。それは俺にとってかなり意外な人物だった。よもやこんな所で会うとは思わなかった。しかも、ここでこの人物に会ったことで、この後の俺の人生は

大きく変わることになる。もっとも、それを知ったのはもっと後のことではあるが…。

「よお、誰かと思えばお前か。」

「Ryo先輩！いつ戻ってきたんですか？」

「先週な。上にいると色々と面倒なんで、ずーっとここに籠っていた」

「へえ…、全然知らなかった。」

Ryo先輩はこれでも科学部に籍を置いてはいるが、科学部の部屋でその姿を見ることはないと言われてるくらい色々な所に出かけている。とにかく行ったら最後、まずいつ帰って来るか分からないと言われていて、日本でRyo先輩の姿を見たものは、幸福になるという噂まで女子局員の間で流れているくらいだった。

久々に会ったRyo先輩は口髭を伸ばしていて、すっかり日本人離れしている。これで今まで局内で噂にならなかったってことは、本当に1週間ここにこもっていたとしか思えない。

「ところで何か用があったんじゃないのか？」

「あ、そうそう、このパーツを捜しに来たんです。」

俺はシモさんに渡されたパーツリストをそのままRyo先輩に渡した。どうせ俺が見てもどこに何があるのか半分も分からないんだ。

「どうせシモさんだろ。なんだか妙な物を作ってたなあ。まあ、待つてな。」

「Ryo先輩、これ見るだけで、シモさんが何を作っているのか分かるんですか？」

「まあな、俺も新型推進装置には興味があつてな。」

Ryo先輩はニヤッと笑うと奥の方にパーツを探しに行ってしまった。

思えばRyo先輩だって俺なんか手の届かないほどの技術を持っているはずなのに、何故か技術課でなく資材課にいるんだよな。時々、俺なんかよりよっぽどシモさんのアシスタントをやったほうがいいんじゃないかと思えて仕方ない。

そう言えば、以前Ryo先輩をプロジェクトチームのリーダーにしようとしたらしいんだけど、Ryo先輩はそれを断ってオセアニア圏へ行ってしまったということがあったらしい。Ryo先輩は個人レベルだと色々なことをやるけど、集団となるとすぐ逃げ出すからな。

「ほら、これで全部のはずだ。」

「あ、どうもすみません」

「ところで、少し時間空いてないか？いくつか訊きたいこともあるし、お茶も入れられると思うが…。」

「えーっとお…。」

一瞬、シモさんの顔と書きかけのレポートが頭の中をよぎったが、次の瞬間にはそれを振り払っていた。

「いいですよ、Ryo先輩の入れてくれるお茶を断る手はない。」

「パーカ、入れるのはお前に決めておろうが。」

「あ、やっぱり…？」

俺達は倉庫の片隅にただパーティーションで区切っただけのオフィスに入ると、適当に机をくっつけて椅子を持って来ると向かい合わせに座った。

「さて、話して何ですか？」

「実はな、ノリの消息が分からんのだよ。お前なら分かると思うんだが、知ってたら教えてくれ。」

他の連中に訊いても本当に知らないらしくてな、役に立たんのだ、これが…。」

「くまさんですかあ…。」

俺は2人分のお茶を入れながら、一瞬どうしたものか考えてしまった。クマさんがどこに行ってるのかは、科学部の中でもほんの一握りの人間しか知らないはずだった。たぶん、2人か3人ぐらいじゃないかと思う。俺は偶然それを知ってしまってはいたものの、当然くまさんから口止めされていた。

「だったら、何なんですか？」

「まあ、お前のことだから知ってるとは思ってなかったがな。」

「だから、何なんですか？」

「ベルギーの方でキャティから撤退しようという話が出ているんだよ。」

「どうしてですか？」

「本当に何も知らんのだな。お前なあ、将来ステーション勤務を希望するつもりなら、もう少し世の中のことを知る必要があるぞ。」

「そんなこと分かってますよ、放っておいて下さい。」

「まあ、そう怒るなって。でな、その理由なんだが、主星である MR-7 星が爆発するというこららしいんだ。」

「そんな莫迦な！」

俺は思わず机を叩こうとして持っていたティーカップを一緒に机に叩きつけてしまい、僅かに残っていたお茶を Ryo 先輩にぶちまけてしまった。

「お前なあ…。」

「すいません。」

慌ててふきんを取ろうとした途端に、今度は Ryo 先輩のカップを倒してしまう。

「もう、いい。これ以上お前が動くとも物が破壊される一方だ。とにかく、俺はもう少し探りを入れてみるつもりだが、場合によってはお前に動いて貰わにやらんかもしれんから、いつでも動けるように仕事を片付けとけよ。」

「は…はい。」

冗談じゃない、いくらくまさんがサイボーグといったって、星が1つ爆発してしまったら、無事で済むはずがないじゃないか。ましてやキャティに住んでいる人達はどうなるんだ…？

そういえば朝から局長に呼ばれていたっけ、ひょっとしてこの件だとしたら、俺もやっとならば飛ばして貰えるかもしれない。

「おい、どうした？」

「いえ、そういえば局長に呼ばれていたのを思い出したものですから。すいませんが、これで失礼します。」

「ああ、じゃあな。」

軽く会釈して出ていきかけて、シモさんに頼まれたパーツをすっかり忘れたことに気付く。Ryo 先輩はちょっと呆れた表情を作って肩をすくめてみせる。俺は苦笑いで誤魔化しながら Ryo 先輩の揃えてくれたパーツを抱え上げた。

「じゃ、今度こそ失礼します。」

ははは…、どうもこの人は苦手だ。

とにかく聞いてしまった以上、後戻りはできそうもない。どっちにしたって後戻りなどする気もないけど。やれるところまでやってやるさ。なんたって、その姿を見た人間は幸福になるという Ryo 先輩から聞いたんだから。

## 第一章 「幸運を呼ぶ男」

H6. 25. APR

## 第二章 「白ヤギは読まずに捨てた」

局長室のドアを前に大きく深呼吸をしてみる。何度会ってみても局長に会う時には緊張してしまう。特に今回のように呼びつけられているとなれば、その緊張感は2倍にも3倍にもなる。

Ryo先輩から話を聞いた後、俺は俺なりに情報を集めてみたが、結局みんなテレビで流れている程度にしか知識を持っていなかった。それはシモさんでさえ例外でなかった。とすれば、この信州支局の中で一番情報を持っているのは、情報部がない以上局長しかいない。

少しは落ち着いたかな、とりあえず当たって砕けろだ。俺はドアをゆっくり3回ノックする。

「入りたまえ。」

中からぶっきらぼうな声が聞こえ、俺は思い切ってドアを開けた。

「失礼します。」

「やっと来たな。まあ、堅苦しい挨拶は抜きだ。」

局長は俺にソファに座れと合図をすると、いきなり俺の正面に座った。はっきり言って、この局長に真正面に来られると余計緊張してしまう。

「君を呼んだのには、実は2つの頼みがあるんだ。」

「私にですか？」

「そうだ。まず1つ目は君に科学部を辞めて貰いたい。もちろん、嫌ならノーと言って貰って構わないが、イエスにしろノーにしろここで即答して欲しい。」

な…なんだって？なんで俺が科学部を辞めなければならないんだ。辞めていったい何をしたらいいんだ？

「科学部を辞めるとしたら、私はどこへ行けばいいのでしょうか？それは説明して戴けるんでしょうね。」

「ああ、理由は簡単だ。今度、この信州支局に情報部を設立することになったのだ。君には情報部で活躍して貰いたい。」

情報部…、俺がこのまま科学部にいたとして、あと少なくとも2年はシモさんの下で働くことになると思う。だとしたら、ここで情報部に移ってしまった方が自分の夢を追いやすいのかもしれない。

「局長、私の夢は宇宙を翔けめぐることです。そのために科学部への配属を希望しました。情報部へ移ることで、その夢を捨てなければならないとすれば、答えはノーです。」

「では2つ目の頼みだ。ベルギーでは現在永世議会が開かれているが、たぶん今週中にはMR-7星への航路が閉鎖されるだろう。君にはその閉鎖された後にキャティへ飛んで欲しいんだ。これは局長としてより、私個人の頼みとして聞いてくれないだろうか？」

え…、俺が？キャティに？宇宙を飛べる？

「あ…はい…、もちろんです。答えはイエスです。是非やらせて下さい。」

「うん、そうか。では早速だが、君に情報部勤務を命じる。また、今日から君の階級は少尉だ。よろしく頼むぞ、三好少尉。」

「はい！」

局長から正式な辞令を貰い、室長がRyo先輩だと知らされた。もっとも新しく部屋を作るほどの余裕はないので、当分は科学部の中に仮住まいということになるらしいが、どうせRyo先輩と2人だし、地下2階が情報部の部屋になりそうだ。

「シモさん、ちょっと話しが…。」

「何よ、今とっても忙しいんだからね。本当は手伝って貰いたいくらいなんだから。」

「残念ですが、それももうできなくなりそうです。」

「それって、どういう意味？そう言えば、局長の話して何だったの？」

俺はちょっと迷って、思い切って局長の話しを教えることにした。

「今日限りで科学部を辞めることになりました。今までお世話になりました。」

「辞めるって、いったいどうして…？」

「今度ここに情報部が新設されることになったんです。俺はそこへ移ることになったという訳です。ちなみに室長には Ryo 先輩がなるそうです。」

「そう…、たっちゃんにとってはその方がいいのかもしれないね。いや、おめでとう。」

「ありがとうございます。ついてはシモさんにお願ひがあるんですけど。」

「何？お祝いよこせって言われてもお金ないよ。」

「いえ、そうじゃなくて、実は来週にも宇宙へ飛び出せるかもしれないんですが、俺は宇宙船を持ってないんで、シモさんに作って貰いたいです。もちろん手伝いますから。」

実を言うと、今シモさんが開発している新型推進装置を使用できれば、とっていたりするんだけど、いくらなんでもそこまでは言い出せない。

「いま作ってる奴が今日中にできるから、そしたらすぐ作ってあげれると思う。後でリストを作るとくから、パーツを集めといて。」

「ありがとうございます。」

俺はシモさんに深々とお辞儀をすると、自分のデスクに戻った。ここでの仕事の大半は、情報部へ移ってもできる物だし、事実局長からもそうしていいと言われている。だけど、個人的にシモさんのアシストをやっていた分だけは今のうちにまとめておかないと、たぶんシモさんにも分かってないんじゃないかと思うから、これだけはすぐにでもやらなければならない。

デスクの引き出しを開けてみると、出てくるは、出てくるは、今まで放っておいた書類が山のように出てくる。半分以上はディスクに入れちゃってて、いつまでも残しておく必要のない物ばかりで、いい機会だから捨てなきゃ。

俺はゴミと必要な書類とを選り分けて、デスクの上に積み上げていった。

「たっちゃん、何やってんの？」

「あ、ヒメさん。」

俺のデスクの上の書類を見て、ヒメさんが目を丸くしている。

「ちょっと身辺整理です。あ、今度科学部から情報部に移ることになりました。ヒメさんにも色々とお世話になったから、今度シモさんと3人で、食事にでも行きませんか？」

「はい、喜んで。でもたっちゃんがいなくなるとここも寂しくなりますね。」

ヒメさんはそう言って、抱えていたファイルから、一通の手紙を差し出す。

「これは…？」

「今日、たっちゃんに届いたんですが、差し出し人が書いてないんですよ。きっと中を読めば分かるんじゃないかと思うんですけど。」

「そうですね。それじゃ食事の件は後でシモさんと相談してということ。」

「はい、それでは失礼します。」

ヒメさんはまったくもって丁寧なお辞儀で俺の前から去っていった。でもよく考えたら、あの人が俺より年上なんだよな。本当はこっちが丁寧にお辞儀しなきゃいけないのに。そう考えて苦笑いする。

俺はたった今届けられたばかりの手紙を数回手の中で転がして、思い切って封を開けた。差し出し人に心当たりがない以上、ヒメさんの言うように中を読んでみるしかないだろう。封筒の中からは3枚の便箋が出てきた。それにしても珍しくはないが、今どき手紙なんて物を出す人がいるとは思わなかった。

えーっと…、差し出し人は…？

「三好せんぱい、すいませんけどちょっと来て貰えませんかあ。」

誰かが俺のことを呼んで慌てて部屋を見渡すと、文化部のアリコちゃんが俺のことを手招きしている。

「どうしたあ？」

「また POWLA-PICO が拗ねてしまって、すいませんけど下村室長と指田先輩がどこにいるのか分からないので、三好せんぱい来て下さいませんか。」

またか…。POWLA の端末機としてシモさんが文化部の為に作ったんだけど、こう度々拗るんじゃ、一度全部チェックした方がいいかもしれない。どうせ近い将来 POWLA-PICO よりもっと使いやすい端末を作って貰わなきゃならなくなりそうだし…。

「先に行っていていいよお。すぐ行くから。」

「はい、お願いします。」

アリコちゃんはなんだかやけに慌てて戻っていった。アリコちゃんが慌てても仕方がないのに…。俺はくまさんのデスクから POWLA-PICO のファイルを借りると、空いている手で自分のデスクに積み重ねた不要書類を持ち上げた。

「ディック、悪いけどこの書類を処分しといてくれないか？」

「シュレッダーにつつまみゃいいんだろ？」

「うん、お願いします。」

俺の隣のデスクのディックに不要書類の処理を頼んでしまった。ディックは俺と同期生で、俺とは違って独自の研究をやっている為、雑用なんかで走り回ったりしない。その代わり一日中ずーっと自分のデスクに座りっ放しなので、科学部内では変わり者扱いされている。

それでも、俺にとっては結構気の合ういい奴なのである。

「移動だってな、寂しくなるけどおめでとうでいいんだろ？」

「うん、ありがとう、ディックこそ早く俺におめでとうを言わせるような研究を発表できるようにならなきゃ。」

「まあな…。」

ディックはちょっとだけはにかんで、すぐにいつもの無哀想な表情に戻ってしまう。

「早く行けよ。アリコちゃん困ってんだろ。」

「あ、うん、それじゃ、その書類お願いします。」

「ああ…。」

俺は片手を振ると、書類の山を残し文化部の部屋へ向かった。

この時、俺のドジで大変なことになるのだけど、とにかく、この時点ではもう頭の中はあの複雑な端末機 POWLA-PICO のことであらう。

## 第二章 「白ヤギは読まずに捨てた」

H6. 25. APR



### 第三章 「黒ヤギを捜せ！」

はっきり言って、いい加減3時間もこんな部屋で待たされると、いくらおとなしい性格の俺でも文句を言いたくなって来た。テーブルとソファがあるだけ、そのテーブルの上にはコーヒーすら乗っていない。壁には窓もなく肖像画が1枚飾られているだけ。

Ryo先輩は、ちょっとトイレと言って出ていったきり、もう2時間も帰って来ないし、こんなことなら読みかけの本でも持ってくればよかった。

「はあ…。」

俺が17回目の溜息をついた時、ようやくノックの音が聞こえ、中年の男が姿を見せた。

「遅くなって申し分けない、ミヨシ少尉。」

「いえ、そんなことはありません。えーっと…。」

「グレンだ。階級は大佐、だが普段はコードネームのスマイルマーキュリーで呼ばれている。ここではみんなそうだ。みんなコードネームで呼び合う。君にも早くコードネームを付けねばな。」

「はい。」

スマイルマーキュリー…、笑う戦いの神は俺の向かい側へドスツと座るとニッコリ笑った。どうも俺の好きになれるタイプでないことだけは確かだ。

「まったく、日本に情報部などという物が必要なのかどうかは別として、今すぐ君がしなければならぬことが二つある。」

「ちょっと待って下さい、うちの室長が…、いえ高橋少佐がこの場にいないうちに話しを始められるのは…。」

「心配ない。彼なら、もうある任務でロンドンへ行ったよ。」

「えーっ！」

あ…頭が混乱してきた。何でトイレに行ったはずのRyo先輩がロンドンなんだ。

「こんなことぐらいで、いちいち驚いていたら情報部はとても務まらないぞ。」

大きなお世話だ。こういう性格だろうとなんだらうと、俺は情報部を選んだんだ。1人くらい、こういう情報部員がいてもいいじゃないか。

「もう一つ言えば、いちいちつまらないことで腹を立てないことだな。」

「分かりましたよ。で、私は何をすればいいんですか？」

「連邦委員長は知っているな。」

「いえ。」

「まあ、構わないが…。現在、隣の永世議会では、キャティ問題で大もめにもめている。というかその原因は、連邦委員長の発言からなのだが。」

「連邦委員長って永世議会で発言権があったんですか？」

「いや、ない。だからこそなんだ。発言権のない者が議会で発言してしまった。しかも、それを他の代表が認めてしまったんだ。まあ、それで議会が揺れていること自体はたいしたことではないが、問題は連邦委員長の挙動だ。彼はいったい何を考えているのか、君にそれを探って欲しいのだ。」情報部での初の任務が、よもや連邦委員長を探ることだなんて…。連邦委員長と言えば、以前くまさんがかなり変わった人だけど一度会ってみるといいよ…とっていたのを思い出す。

「もう1つは？」

「彼の胸のうちを探った後、ただちにステーションVRに飛んで欲しい。おそらくそこでタカハシと会えるだろう。以上、質問は？」

「ステーションVRへはなぜ行くのでしょうか？行って何をすればいいのでしょうか？」

「それは自分で調べたまえ。他に質問がなければ以上だ。」

俺の質問をにべもなく突っぱねると、グレン大佐は立ち上がった。

「ああ、そうだ、もう一つだけ君に言うておこう。情報部には国境はないが、連邦政治局には国境が存在する。君が宇宙で生き延びたかったら、この言葉を忘れないことだ。」

「それはどうも、心しておきます。」

グレン大佐に形式だけ頭を下げてみせたが、はっきり言うてこういう人物は嫌悪感こそ抱けども、とても尊敬する気にはなれない。とにかくグレン大佐が出ていって来て、やっとホッとした。さあてと、とりあえずどうしたものだろう？どちらかという、まさかいきなりベルギーで1人になるとは思っただけに、どうしていかよく分からない。だけどRyo先輩がここにはいないのは事実だし、ここは1人で動けなくちゃ…。

それから10分間、俺は考えに考えて、ある一つの結論に達した。それは自分が情報部の任務には向いていないだろうということ。影から影へ動くなんてRyo先輩のような真似は出来ないだろうってこと。とすれば、俺は俺自身の道を作るしかない。

なんか考えがまとまったらすっきりした気がする。俺はすぐに部屋を出た。どこへ行くべきかは決まっている。

情報部の建物を出ると…、正確に言えば裏口から堂々と出ると、そのまま本部局の建物へ潜り込んだ。普通は政治部の受付を通らねば入れない本部局も情報部の建物からのみノーチェックで潜り込める。聞いた話によると、ある情報部員が作った抜け道が今じゃ堂々と使われているんだそうで、せっかくだから俺も使わせて貰ったという訳。

とは言ってもこのまま議会会場へ行った処で、何の資格も持たない俺が入れるとも思えない。それなら連邦委員長のプライベートルームに忍び込む方が面白い。俺は迷わずプライベートルームの方に入った。

「ピッ、不法侵入者1名確認しました。」

うわっ！いきなり頭上から電子音が聞こえてきて、反射的に天井を見上げた。天井に取り付けられている電子アイがこっちを見ている。

「氏名および所属と目的をどうぞ。」

あ…、思い出した。そういや連邦委員長のところにウィンダムという名前のロボットがいるって言うてたっけ、それでわざわざ資料を集めたんじゃないか。ウィンダムに対する応答の仕方は単純明解、嘘さえつかなくや敵とはみなされない。

「情報部所属三好少尉、連邦委員長に会いたくて黙って忍び込みました。」

「ピッ、情報部ミヨシ少尉、確認しました。どうぞお入りください。」

俺の正面にあったドアが勝手に開いた。開いたということは、とりあえずウィンダムに登録されたということだから、たぶん今後忍び込む時もフリーパスになるはず。

「ピッ、ようこそ、いらっしやいました。委員長は現在議会議場で会議ですので30分ほどお待ち下さい。」

キャタピラ走行式のロボットが、俺を迎えてくれた。信州の科学部に残っていた資料通りの体型を

している。つまり、ウィンダムはどういうわけだか日本製らしい。

「ピッ、お飲み物をお持ちしますが、何がよろしいでしょうか？」

「じゃあ、紅茶をお願いします、あ、できたらミルクで…。」

「ピッ、かしこまりました。どうぞくつろいでお待ち下さい。」

ウィンダムは額についているインジケータランプを激しく点滅させながら、奥の方へ引っ込む。俺はちょっと目の前のソファを眺めて、意外とこれはチャンスかもしれないと思ひ直す。俺は連邦委員長のことを探りに来た訳だから、委員長がいない今はよく考えりゃ絶好のチャンスじゃないか。そうと決まれば話しは早い。ウィンダムが戻ってくる前に何か見つけなきゃ。

デスクに近寄ると、引き出しを片っぱしから開けていく。しかし、一番上の引き出しには筆記具や定規などの文房具の類。真ん中には使っていないノートやレポート用紙。一番下の引き出しにはファイルが並んでいるが、どれもこれも組織の書類ばかりで、委員長個人のファイルは一冊もない。カタカタというウィンダムのキャタピラの音が近づく。仕方がない、これ以上は無理か。そーっと引き出しを全部閉めると、ソファに落ちていてウィンダムを待つ。

「ピッ、お待たせしました。」

ウィンダムが器用な手つきで俺の目の前にティーカップを置く。

「へえ、面白い香りのお茶だなあ。」

「ピッ、どこのお茶だか分かりますか、ミヨシ少尉。」

ウィンダムが何やら俺を試すような言い方をする。

「さあ、俺も色々な種類の紅茶を飲んだけど、こういう不思議な香りは初めてだ。これもフレーバーティーの一種なのかな？」

「ピッ、いえ、この香りはこのお茶独特の香りです。これが分からないとなると、ミヨシ少尉これから苦勞しますよ。」

なんだって、ロボットなんぞにこんなことを言われなきゃならないんだ。いくら情報部勤務になったとはいえ、俺はつい3日前まで科学部の一般局員だったんだからな。Ryo先輩のような特別製でないかぎり、知らなくて当然じゃないか。

「どっちにしたって分からないよ。ウィンダム教えてくれよ。」

「ピッ、これは是非とも自力で思い出して貰わないとなりません。」

「思い出す…？」

俺は一瞬、ウィンダムの言葉の意味を理解できずに、思わず聞き返してしまった。だけど、その答えはウィンダムではなく、なぜか俺の背後から返ってきた。

「そうとも君は前に1度だけそのお茶を飲んでいるからね。」

「え…？」

振り返った俺の目に映ったのは、さほど大きくもない背、適当にはねている髪の毛、眼鏡をかけていて、赤いファイルを小脇に抱えている人物。どこかで会ったことがあるような顔には、悪戯っぽい笑みが浮かんでいる。

「まいったな、こんな所までやって来るとは。その必要がないように、あの手紙を君に送ったんだが。まあ、来てしまったものは仕方がないか。ようこそ三好くん。」

「手紙…？手紙って何ですか？」

この人物が信じ難いことに本物の連邦委員長らしい。確かに面白いと言えば、これだけで充分面白

い。と言っても面白がってばかりもいられない。

「とすると君はあの手紙を読まずに、結果的にここへやって来たという訳だ。うん、なかなか面白い展開だぞ。私の生命ももう先が長くないことだし、ここで君に会えたのはチャンスかも知れないな。そう、君にとっても、私にとっても。」

そう言って、連邦委員長は俺について来いという仕草で本棚へ近づく。

そういえば1つ思い出したが、手紙と言えば、あの日…、俺が局長から情報部設立の話を聞いた日に貰った差し出し人不明の手紙は、結局読まなかったんだ。というか正確に言えば読めなかった。ディックに不要書類の処分を頼んだ時、どうも一緒にまぎれ込んだらしい。気が付いて連絡した時には見事シュレッダーされた後だった。

そうか、あの手紙の差し出し人は連邦委員長だったのか…。ん…？なんで委員長が俺に手紙を送る必要があったんだ？

「その顔では、何で自分が選ばれたのか分からないって顔だな。いいだろう、君にはどうせ話さなければならなかったんだ。」

委員長が1冊の本、背表紙に「FERIA」と書いてある本を本棚から引き抜くと、本棚全体が横に移動し、地下への階段が現われる。

「何もこんなしかけを作る必要もないのだが、こればかりは趣味でね。」

委員長はニヤッと笑うと、階段を降りていく。

どうも本当に厄介事に巻き込まれるらしい。これもそれもすべて Ryo 先輩と会ってからだ。俺の周りで何かが少しずつ起きようとしている。

ええい、こんなことで、怖気付いてどうするんだ。宇宙へ出るためにはどんなことでもやる決意だったのに…。

—一年〇月×日、情報部三好少尉、姿を消す。

### 第三章 「黒ヤギを捜せ！」

H6. 25. APR

#### 第四章 「霧のロンドン・スペースポート」

三好を置いたままでロンドンくんだりまで来ちゃったが、あいつ大丈夫かな。まあ、あいつも一応は情報部の人間になったんだし、放っておいてもなんとか生きていくだろ。

さて、シモさんが来てるはずなんだがなあ…。

「おーい。Ryo こっちこっち！」

「どうも。」

「いきなり、誰が来るのかと思ったら、Ryo だっていうから思わずぶっ飛んでしまったじゃないか。」

「いやね、情報部設立の話は随分前からあった訳で。でえ、俺はそれをちょうどシドニーにいる時に耳に入れてですね。ま、早くから根回ししておいたという訳です、これが。」

シモさんは相変わらず、どこへ来てても変わらない。ま、順応するという意味では、俺もどこでも大して変わらないのだが。

「で、どこまでできてます？」

「それが聞いてよ。わたしはRyoがこっちで作らせてるの知らなかったし、たっちゃんが1艇作って欲しいっていうから、ほとんど組み立ててあったの。それなのに急にロンドンと合流して、新型推進装置の完成品を使えって命令でしょ。いったい誰が裏でやってんのかと思えばRyoだと言うしあせったんだから。」

「日本にいる時に直接話してもよかったんですが、こっちの人間を無視するのも悪いと思って。で、あと3日で飛びたいんだけど、間に合いますか？」

「任せて、3日もあれば充分。たっちゃんには悪いけど、信州で途中まで組み立てた奴をそのまま使うからあとは簡単だし。」

「頼りにしてます。それじゃあとで顔見せに行きますけど、ずーっと工場の方にいます？」

「えーっとたぶん、今日は一日中つめてると思う。」

「分かりました、じゃ、そういうことで。」

ロンドンはかなり大きいスペースポートがあるのが知られているが、それと匹敵するだけの組み立て整備工場がある。これのおかげで割と新型機の開発はここで行われることが多い。今回は俺がわざわざ機体をここで作らせ、推進装置だけシモさんが開発した新型を組み込むように手配した訳だ。俺はシモさんと工場の前で別れると、そのままこっちの情報部へ向かった。こっちの室長はレビンという男で、俺が2年前南極へ行った時、ある事件で一緒に組んだ仲だった。割と気心は知れているし、その意味では今回の仕事はやりやすいと言えるな。

…とよく考えたら、情報部の任務としちゃ今回が初めてだったんだっけ、ま、どっちにしたって、俺にとっちゃん同じことだが。

「情報部高橋少佐、入ります。」

情報部の慣例で、受付でのIDカードのチェックがないので、こうして部屋に入る時、身分を名乗る。こうしないと、後で疑われても文句が言えない。

「Ryo、こっちだ、ちょうどデータが揃ったところだよ。」

部屋の一番奥でレビン室長が大声を出す。

「どうも、お久しぶりです。元気でしたか？」

「ああ、ようやくお前さんも同じ畑に来たんで、また一緒に組めるって喜んでいるよ。ま、ここに

いる間で、何か不便があったら何でも俺に言ってくれ。」

「その時はお願いするとして、いきなり本題に入りますけど、MR-7 星系のデータは？」

俺が科学部時代いくつか集めた MR-7 星のデータを基に、実際に爆発する時期を調べて貰っていたんだ。なんせ公に発表されているデータなど、半分以上はお偉方の手で適当に変えられているのが常識だったからだ。初めっから信用なんてしていなかった。

一番確実なのは、コンピュータ POWLA が持っているデータなんだが、この地球上で唯一、情報部の人間でも潜り込めない場所として、POWLA ルームは余りにも有名すぎる。もっとも POWLA ルームがどこに存在するか知っている者が果たして何人いるか、そっちを探る方だけでも難問だという話したが。

「まず MR-7 星系のデータだが、惑星は 4 つ、内側からアンバサ、ブリーズ、キャティ、コボル、このうち第 3、第 4 惑星のキャティ、コボルは地球型の大気を持っていて、人類の生存が可能だ。」

「レビン、俺は…。」

「分かってるよ、こんな公表されているデータは今さら必要ないっていうんだろ。けどもう少し俺の話しを聞いてくれ。」

「あ、ああ…。」

どうもレビンは物事を遠回しに言うのが好きで、俺はそういうの苦手で、分かっているけど、つい口を缺んでしまう。

「要するに、本当に言いたかったのは、MR-7 星系で近々惑星直列が起こるってことなんだ。これは POWLA の発表からは故意に隠されていた。」

「ということは、それが MR-7 星の爆発の直接の原因か？」

「99%な。少なくとも今まで MR-7 星系で惑星直列が起きた記録はない。それが何か意味があるかどうかはちょっとな。」

「だが太陽系では過去何回か起きているが、太陽は爆発していない。」

「それならば簡単に説明がつくよ。現在 MR-7 星自体地殻が不安定期にあるということと、MR-7 星と 4 つの惑星の質量バランスが悪いんだ。MR-7 星系は 4 つの惑星の公転面の角度がすべて違う為に、普段は万有引力がバラバラに働いてバランスがとれているが、今回はその万有引力が同じベクトルで働く。だいたいこういう星系が今まで存在できていたことの方が不思議なんだよ。」

レビンは俺の前に 1 束の書類を投げてくる。中をパラパラと走り読みすると、MR-7 星のデータがびっしり。たぶんこれを読めば MR-7 星が爆発する理由を納得できるんだらうと思う。だが、今はそんなことをしている暇はない。

「で、上層部の意志は？」

「ステーション VR の撤退、今は連邦委員長がストップをかけているが、明日撤退してもおかしくない状態だ。上は地球だけが可愛いんだ。」

レビンは、吐き捨てるように言う。レビンはアウトーツェン圏の出身の為、上層部の地球絶対主義は許せないらしい。レビンが情報部に籍を置いているのにも、その辺が理由なんじゃないかと俺は思っている。

「今、誰が向こうへ行っているか、分かるか？」

「ああ、日本人が 2 人、開発部の人間だな。名前は入手できなかったが、1 人はサイボーグらしい。」ノリだ、やっぱりアルトロンを使ってるのはノリだったのか、とすりゃ状況から考えて、あとの 1

人は湯浅さんしかいないな。どういう経路でノリが連邦委員長と知り合ったのか、それが分からんのだが、どう考えてもなんの脈絡もないんだよな。

ちょっと待てよ、もし三好がこのことを知ってたとすりゃ、グレン大佐はわざと三好をベルギーに残したのか。おいおい、俺は出し抜いたつもりで出し抜かれていたって訳か。参ったな…。

「おい、どうした…？」

「あ、いや、そうだ、レビンに頼みがある。現在議会でキャティ側についているのが誰か正確に知りたい。」

「そんなことならお安い御用さ。明日の朝までには揃えておくよ。」

レビンは妙に人なつこい表情をする。普段は難しい表情ばかりで、余り人づきあいがいい方ではないはずなんだが、なんでだろう俺の前だけこんな人なつこくなるのは…。

ま、とりあえず明日の朝だ。明日になればそれだけこっちの情報も増える。今は情報を集めることだけを考えるんだ。動くのは三好に任せればいい。

「じゃ、俺は工場の方に行くから、あとのこと、よろしく。」

「ああ、任せとけ、ただし MR-7 星系へ行くなら、俺をパートナーに選んでくれよ。」

「生憎と、今回はパートナーが決まっているもので、ま、次回を楽しみにしてます。」

レビンが左手を上げる。昔俺達がよく使った合図だ。この部屋は盗聴されている？しかし次の瞬間、レビンが目で早く行けと合図を送ってきた。確かにここで立ち止まっているのは利口なやり方じゃない。

俺は頭だけ下げると、すぐに部屋を出た。

さて、このまま工場の方へ行ってもいいんだが、盗聴機の方が気になる。どうするか…、暫く考えて俺はある1つの解答を得た。少なくとも現在の俺にとって最善の手である筈だ。そう、俺は俺の勘を信じる。

近くのオフィスで電話を借りると、工場のシモさん呼び出す。

「あ、Ryo、どうしたあ？」

「シモさん、俺、悪いけど用事ができて今日は行けなくなったんで、たぶんテスト飛行には三好が来るはずだから、助けてやってくれと大変助かるんですが。」

「たっちゃんが？それは構わないけど、Ryo はどこへ？」

「日本へ、どうしても片付けなければならぬ仕事が入ったもんで、それじゃ、あと、よろしくお願いします。」

「ほい、それじゃ、また…。」

俺自身に盗聴機が付いている可能性もあるが、俺はそれを逆手にとってやる。

受話器を置くと、外へ出た。珍しく陽射しが気になって、サングラスをかける。どうせ三好は 24 時間以内に必ずここに来る。俺はそれまで、ちょっと遊んでやる。

俺は歩いて空港へ向かった。

#### 第四章 「霧のロンドン・スペースポート」

## 第五章 「今日はとくに問題なし」

今日もとくに問題なし…と、業務日誌に何回書いたことだろうか。来る日も来る日も、いや私がこの室長になって以来毎日のように、書かない日がないくらい書いている言葉だ。

初めのうちはそれでいいとも思った。文化部なんてところは何も無いのが普通であって、科学部、情報部などと違って、厄介事が舞い込むことも、第一線に出ることもない。繰り返し訪れる日常、それが文化部のすべてである。

しかし、最近それがどうも物足りなく感じるようになってきたのだ。私が単なる文化部室長で終えたいなら、このまま平穩無事に過ごした方がいいに決まっている。だが、最近の私はそれが嫌でたまらない。何故か無精に外へ出たかった。何か新しい物を見つけたかった。自分の可能性について、もっと深く考えてみたかった。そしてそれをやるのは今しかないような気がするのだ。

私がこういう気持ちになったのも、すべてあのお嬢さん達のせいだろう。いや、お陰と言った方がいいかな。それと惑星キャティ…。それらが私の運命を変えようとしていると言っても過言ではない。

文化部のびっくり3人娘、彼女達があのくまさんと一緒に MR-7 星系へ向かった時から、少しずつ私の…、いや私達の周囲すべての歯車が少しずつ狂い始めた。

「佛木先輩、科学部の宇民さんという方から電話です。」

「ああ、ありがとう。」

今や、この部屋で唯一の女の子になってしまったアリコちゃんから受話器を受け取った。宇民先輩がわざわざ電話してくるなんて、いったいどうしたんだろう。

「もしもし…。」

「あ、佛木くん？実はシモさんから頼まれたんだけど、カリフォンが出来上がったからいつでも使ってください。」

「それはわざわざ、どうも。で、シモさんはどうかしたんですか？」

「あ、知らなかった？情報部の仕事でロンドンに行ってるんだよ。たぶん明日か明後日には帰ってくると思うけどね。」

「ふーん…。そうですか。それじゃ、近いうちに使わせて貰いますから。」

そうかシモさん、ロンドンへ行っていたのか。

Mya は南極に取材に行ったまま帰らないし、柴野さんはベルギーへ連れていかれたっきり、明子ちゃんとかまさんはキャティへ行ったし、たっちゃんは情報部へ移った途端に連絡がつかない。Ryo 先輩が帰ってきてたらしいけど、すぐ消えてしまった。この日本に残っている仲間もすっかり少なくなってしまった。

「佛木先輩、科学部から何の電話だったんですか？」

アリコちゃんが不安そうな表情をしている。

「頼んでおいた宇宙艇が出来上がったって連絡。」

「佛木先輩もどこかに行っちゃうんですか？」

ああ、なるほど、あの3人が抜けて、一番辛い思いをしていたのが、アリコちゃんだったから私がどこかに行くのか心配している訳だ。



「行ければいいんだけどね。」

「え…？」

キョトンとしているアリコちゃんの頭をポンと叩いて立ち上がる

「ちょっと局長室に行ってくる。すぐ戻るから。」

「あ、はい。」

実を言えば、まったくその通りだったりする訳だ。文化部も外へ出るべきだ。ついては文化部専用の宇宙艇が必要だ、なんてのは表向きの理由で、本当は私が外へ飛び出す機会を伺っているのである。

もし、今すぐ飛び出せるのであれば、きっと私は迷わずカリフォンの宇宙へ出ていることだろう。もっとも私に操縦ができればの話なのだが。

局長室のドアをロックすると、中の返事も待たずにすぐ中へ入った。局長はちょうどどこかと電話で話している所で、生憎とこちら側からではモニターテレビが確認できないので相手が誰かは分からない。ただ会話の様子からすれば、ベルギーの人間らしい。

私は勝手にソファに腰を降ろすと、その様子をじーっと観察していた。

5分ほどで用件は済んだらしく、局長はまたいつもの苦虫を潰したような顔つきに戻った。

「どうした、お前の方から来るのは珍しいな。」

「ええ、ちょっと局長の許可が必要になったもので。」

「なんだ？」

「実はカリフォンが完成したもので、その使用許可と、使用範囲なんです。」

局長は、自分のデスクの引き出しからファイルを取り出すと、何かを調べ始める。

「確か、文化部専用で使用するということだったが、ということは搭乗するのは湯浅、桂、柴野の3人だけでいいんだな。」

「それなんです、私を加えて戴く訳にはいかないでしょうか？」

「お前を？お前は操縦できないだろう。」

「ですから、私がライセンスを取ればという条件付きですが。」

局長の苦虫を潰したような顔がさらに歪む。

まあ、文化部の室長が外へ出ていくなんてのは前例がないことだけに仕方がないと言えば仕方がない訳だが、私としても言ってしまった以上、是非ともこの場で許可を取りつきたい。

「家の者は知っているのか？」

「いえ、局長に話したのが初めてです。」

「よし、では他の者には誰も言うな。ライセンス取得については私が考えてやろう。」

「ありがとうございます。」

「待たたまえ。一つ伝えておくことがある。」

「は…？」

「明日の正午の便で桂中尉が南極から帰ってくる。」

「本当ですか？」

「ああ、さっきベルギーから連絡があった。帰ってきたら本人にここへ来るよう伝えてくれ。」

「分かりました。そうします。」

今度こそ部屋を出ると、私は大急ぎで総務部の部屋まで駆け降りる。実は電話を使えばよかったと

思いつつも、結局落ち着いてなんかいられないという訳だ。慌て過ぎて人とぶつかりそうになって、身体をひねってギリギリでよける。

「大丈夫ですか？」

こちらがぶつかりそうになったのに、逆に心配されてしまい、さらに慌ててしまった。

「いや、こちらこそすいません。」

年の頃なら、30 過ぎくらいの男だが見たこともない奴だ。何とはなしに見た服の胸には科学部の人間だけが付けているバッジが付いている。科学部の人間なら 1 人残らず私は知っているが、少なくともこの男はこの科学部の人間ではない。

「あまり見かけませんが、どこの方ですか？」

「今度ワシントンから来た八木と言います。科学部の人間です。」

「私はこの文化部の室長をやっている 佛木です。八木さんといいましたね。どうして急に日本へ？」

「なんでも 2 人抜けたとかで、穴埋めでしょう。」

なんかおかしい…。そんな予感はあるけれど、何がおかしいのかまでは分からない。

「とにかくよろしくお願いします。」

「いや、こちらこそ。」

そう言って、立ち去ろうと別れた途端、聞き慣れたアクセントで私の名を呼ぶ声を耳にした。

「あ、そうそう、佛木さん、局長室はどこだか教えて戴けますか？」

私は反射的に振り返った。さっきは気付かなかったが、真っ直ぐ突き刺さるような瞳。私はこの瞳をよく知っていた。そうか、それで何かがおかしかったんだ。

「今、シモさんはロンドンだよ。部屋には宇民先輩しかいないんじゃないかな？」

「は…？」

「もし、近いうちにキャティに行くことがあったら、明子ちゃんに敗けるなって伝えてくれ。」

「あの…、私は局長室が…。」

「それじゃ。」

しどろもどろになって慌てている たっちゃんを残したまま、私は似合わぬ変装の たっちゃんの姿に笑いをこらえて、総務部のドアを開ける。

たっちゃんもどうせなら適当に誤魔化してすぐ行けばいいのに、下手に私をだまそうとなんかするからこういう目にあうんだ。たっちゃんがいくら変装したって、その目立つ瞳と素直過ぎる性格は、君を知っている人間なら誰でもすぐ見破ってしまうだろう。さすがに情報部の変装術はたいしたものだけだね。

「あら、佛木君、どうしたんですか？」

「調べて欲しいことがあって、ヒメさん、いま手が空いてますか？」

「なんでしょう？」

「うちの柴野さん、知ってるでしょ？」

「はい。」

「その柴野さんの居場所を調べて欲しい訳。できたら本人に連絡がつけられれば最高なんだけど。」

「いつまでですか？」

「できたら、明日のお昼までをお願いします。」

「はい、承知しました。」

姫さんは丁寧にお辞儀をすると、さっそく調べ始めてくれた。

いくら柴野さんに秘密の能力があるといったって、あの子はうちの文化部の局員なんだ。それを私に断わりなしに、しかも私に行き先さえ告げずに連れて行くやり方、私には許せん。Mya の件にしたって、わざわざ3人の仲を引き裂くように、無理矢理に南極への任務を押しつけ、身動きが取れないようにして。最近の本部局はいったい何を考えているんだか。

これもそれも、すべてキャティのことが引き金になっている。局長は局長で何か考えがあって動かしているんだろうけど、くまさんやたちゃんは動かしても、私はかやの外へ置くつもりらしいし、それならば私は私でやるしかない。

今までは一介の文化部の室長でしかなかった私だが、もし本当に夢を追うつもりなら、ここで本気で全部捨てなくてはならないかもしれない。もともと、私は室長なんて器じゃないのだ。望んで手に入れた訳でもない。ただ局長が私も知らなかった遠い親戚というだけで開けた出世の道。そのせいもあって、私は知らず知らずのうちに臆病になったのかもしれない。

「あ、佛木先輩、助けて下さいよ。また POWLA-PICO がおかしいんです。」

「弱ったな、アリコちゃん、科学部へは？」

「分かる人が誰もいないんです。どうしましょう。」

「分かった。私が見てみるよ。」

「お願いします。」

まったく仕方ないな。私はちょっと苦笑いして、ふと業務日誌が目についた。

今日もとくに問題なし…かな？

アリコちゃんが POWLA-PICO の前で怒っている姿が見える。

## 第五章 「今日とはとくに問題なし」

H6. 25. APR

## 第六章 「宇宙を翔ける山羊であれ」

まいったなあ、完璧に変装したと思ったんだけど。あの様子じゃあ完全に佛木先輩には正体ばれただろうな。グレン大佐には報告するのはよそう。どうせ笑われるだけだろうから。それより気になったのは佛木先輩のあの台詞、まるで俺がこれから何をするのか、知っているかのような言い方だったけど…。

連邦委員長の話しでは、このプロジェクトで動いているのは、情報部の中の一部とくまさん、明子ちゃんくらいで、しかも詳細を知っているのは、ここ日本では局長しかいないはずなんだ。まさか佛木先輩がこのキャティの件に関わっているとも思いにくいし…。

俺が忙しい中にわざわざ日本へ戻ってきたのには2つの理由があって、1つには POWLA-PICO のデータの入手と、もう1つには三好栄次という人間の抹消だった。

POWLA-PICO の存在は各国でも注目していたらしく、EC圏でも何度か同じものを作ろうとしたらしいが、何故かデータを持っているシモさんとくまさんが、POWLA-PICO を外へ出すことを嫌い、未だ日本以外の場所に存在しない。確かに POWLA-PICO は故障が多いことでこの信州では有名だが、あの2人がそれだけの理由で外へ出さなかったとは思えないし、俺個人としては POWLA をもっと活用すべきだと思っているくらいだから。ちょっと悩んだんだが、結局日本からデータを持ち出すことにした。

佛木先輩にばれてしまってから、一応用心の為、人に会わないよう注意して、5階の局長室まで辿り着く。小さく2回ノックしてドアの隙間に身体をすべりこませる。

「誰だ！」

俺は気にせず、局長の前に立った。どっちかといえばここですぐ正体が見破られるより疑われたほうが嬉しいという話がある。しかし、ここで騒ぎを大きくするのは俺の本意じゃない。俺は科学部のバッジを上着から取ると、局長の前に置いた。

「これをお返しするのを忘れていましたので。」

「三好くん、いや三好少尉か、噂には聞いていたがここまで化けるとは…。」

「局長、こんな変装で驚いてはいけませんよ。情報部の技術は科学部の比ではありません。正直言ってこの1週間私はいやというほどこの目で見えてきましたから。」

「そうか…。」

局長は大きく溜息をつく、ドスンと椅子にもたれかかる。

「実は明日、ステーションVRへ飛びます。私にこういうチャンスを与えてくれたこと、きっと一生忘れませんよ。」

「うん、私との約束、頼むぞ。」

局長は右手を出す。しかし俺はそれをやんわり押しとどめ、代わりに敬礼を贈る。そしてきびすを返す。もう時間がない、行かなきゃ…。

「局長、俺への餞別代わりに POWLA-PICO を下さい。いつか別の形で恩返しができると思います。」

「おい。」

局長の言葉を無視してそのまま通路に飛び出した。もう、ここまで来たら止まれない。4階の科学部まで一気に駆け降りる。勝手知ったる元自分のオフィスという訳でドアを開けてから、くまさんのデスクから POWLA-PICO のファイルを取り再び通路に飛び出すまでわずか30秒。どういう訳だか

オフィスにいるはずの宇民先輩すらいない。

まあ、俺は POWLA-PICO のデータさえ手に入れられれば、それでいいんだけどね。あとは、これでロンドンに戻ってステーションVRへ向かえば、俺の任務の90%は終了だな。そうと決まれば、日本にいつまでもいるのはまずい。

俺は信州局の建物を出る。もう暫くはここへ戻ってくることもないだろうな。何となく後ろ髪を引かれるような気がして、俺は自分の目に信州局の建物を焼きつけていこうと振り向く。信州の風景の中に溶け込むように立っている旧時代的な建物、俺が初めてこの建物を見た時と少しも変わらぬ姿で、俺を見送ってくれる。

なあんて、ちょっと気障過ぎたかな。ま、いつもが少しドジだから、今日くらいは恰好つけたっていいだろう。

そう1人で納得した途端、誰か前から来た人とぶつかって、相手を転ばしてしまった。

「あ、すみません、大丈夫ですか？」

慌てて助け起こそうと手を差し出した瞬間、転んだ相手が俺の知っている人であることが分かって、出した手を引っ込めてしまう。

「痛たた…、何とか、あ、立てますから。」

なんで南極にいるはずの Mya が、こんな所にいるんだ？

一瞬パニックに落ち入りかけて、すぐに自分は変装しているという事実を思い出し、ここは何としても誤魔化し通そうと心に決めた。

「本当に、申し訳ないです。ちょっとよそ見をしていたもので。」

「いえ、あたしの方こそ、考え事しながら歩いていたから。もう本当に大丈夫ですから。」

見ると、側に2つも鞆が転がっている。なるほど今日南極から戻ってきたばかりなんだ。

俺は鞆を拾い上げて、Mya の脇に揃えてやる。

「それじゃ、お互い気を付けましょうね。」

俺は手を振って、その場を離れる。

珍しく心地よい風がほおをなぜ、俺はつい振り返ってしまう。Mya は、まだその場に立ったままこっちを見ていて、俺が振り返ったのに気付くと、思いっきり手を振り始める。

俺の夢は宇宙を飛ぶこと、その夢はここで生まれ、ここで育ち、ここでチャンスを与えて貰った。そしてそのチャンスを作ったのは、あの子だ。キャティ発見に大きく貢献したという桂美和中尉。俺は姿勢を正すと、Mya に敬礼してみせた。ありがとう…。

そして、すべての思いを胸にしまい込んで、俺はキャティに向かった。

第六章 「宇宙を翔ける山羊であれ」

H6. 26. APR 第七章 「みんなの心を一つにまとめて」

「ピッ、新聞を持ってきましたが、すぐお読みになりますか？」

ウィンダムはインジケーターをゆっくり動かしながら、ちょっと首をかしげる。

「いや、あとで読むから、その辺に置いといてくれないかな。」

和岐は深く大きい溜息をつくとき、手にしていたメールの束をバサッとテーブルの上に放り投げる。そのままソファにそっくり返って煙草を取り出すとき、ウィンダムが心配気に側に寄ってきてすかさず火を付ける。

「ピッ、具合でも悪いのではないですか？それから最近煙草の量が増えています。少し控えるようにして戴かなければ…」

「分かってるさ、だが吸わずにはいられないんだ。それに、近いうちに誰も私のことを必要としなくなるんだ。身体の心配をする気にもならんよ。」

「ピッ、また予知能力ですか？ですが委員長の予知は不確定要素が多過ぎます。そんな能力のせいで身体を壊されては私が困ります。」

和岐は煙草の煙を大きく吐くと、苦笑いをしながら灰皿に揉み消した。

「分かった、分かった、まったくお前にやかなわんよ。さて、いい加減、仕事をするかな。いくらもうすぐ辞めるつもりだとはいえ、今はまだ連邦委員長だ。」

大きく伸びをしながら立ち上がると、和岐は自分のデスクについた。このデスクは特注で POWLA の端末機が組み込んであり、たいがいの情報であれば瞬時に呼び出せるようになっていた。それはデスクのディスプレイ上にも映し出せるし、ウィンダムを通して音声出力することも可能だった。つまり、これは POWLA-PICO の数倍の機能を持ち、全宇宙でたった1台しかない POWLA-WIN なのである。しかし、それも普通の人が使えばただのデスクでしかない。

和岐はディスプレイ上を適当にキータッチして、いくつかのデータを次々に呼び出すと、それを文書に直し、永世議会へ提出する為にウィンダムに持たせる。

今でも、この連邦委員長のプライベートルームの隣では MR-7 星系問題について議論が行なわれている。だがそれも、あとわずかの後には全員一致の議決をもって MR-7 星系を見捨てるということに決まるだろう。和岐がいくら1人で戦っても、もうこの流れは止めることはできない。

それでも彼は最後まで反対し続けねばならなかった。それが彼にとっての連邦委員長の姿だったから。それが、彼が今までしてきたことへの償いだったから。

「ピッ、委員長、行って参りました。」

「ご苦労さん、議会の方はどうだった？」

「ピッ、あと1日もてばというところでしょうか。それから、1つ情報が入っていますが。」

「何だ？」

「ピッ、桂中尉が予定を1日早めて日本へ帰ってきました。どのように致しましょうか？」

ほう、あの子が…、いつもながらこっちの予定通りに行動しない子だ。しかし、お陰でいい考えが浮かんだ。

「信州局の佛木局長に連絡をつけてくれないか。」

「はい、かしこまりました。」

本部局長め、上手く俺の持ち駒を分散させたつもりだろうが、まだまだ俺は諦めんぞ。確かにお前の望み通りに、俺はキャティと共に散ってやろう。だが、ただではやられんぞ。必ず新しい世界をすべての人類に見せてやる。

「委員長、信州につながりました。」

ウィンダムから電話を受け取ると、和岐はモニターのスイッチを入れた。画面に相手の顔が映る。

「佛木局長、久しぶり、どうですか、そちらの様子は？」

「静かなものだよ。すっかり寂しくなってしまった。いったい今度は誰を連れていく気なんだ？」

「全員が全員とも僕のせいと思われるのは心外ですけどね。ま、何人かは確かに僕が動かしていますから、仕方ないですけど。」

「私はもう誰も殺したくはないのだ。もちろん、君を含めてな。」

10年前、佛木局長がまだ東京支局の科学部室長だったころ、和岐はまだ一介の研修生として、トレーニングを受けていた。思えば不思議なものだ。和岐の特種能力を発現させた、あの忌まわしい事件をきっかけにすべての歯車が少しずつギクシャクずれ始めてしまったのだ。それが、今またMR-7星爆発という事件を軸に狂った歯車達が今度はそれぞれの能力を持ち寄って、ずれていたものを直している。

佛木局長は、深い心の傷の代償として今の地位を与えられた。同じように和岐も連邦委員長という権力を手に入れた。それならば、その地位と権力は傷を癒す為に使うべきではないだろうか？

それに2人ともキャティの住民達を10年前の自分達だけにはしたくなかった。

「桂中尉が帰ってきたはずです。彼女にすぐベルギーへ来るように言ってください。」

「何を考えている？」

「あの3人は、3人揃ってこそその能力です。桂中尉には、柴野中尉を連れてキャティに行って貰わねばなりません。」

「3つの歯車を1ヶ所に集める気か？」

「佛木局長、3つではありませんよ。10年前狂った歯車全部です。それに桂中尉にはもう1つやって貰わなくてはなりません。」

和岐はニヤッと笑ってみせて、さあ何だか当ててみろという顔をする。これは10年前の2人にとっては日常茶飯事の出来事だった。和岐が佛木局長を試す。そうすることで2人は互いの年令差を埋めようとしていたのかもしれない。

「死に急ぐなよ。桂中尉には文化部の任務ということにしておこう。私としては、君に死なれては困るのだ。」

和岐は一瞬大きく瞳を見開いて驚くと、肩をすくめてみせる。

「どちらでも構いませんがね。」

佛木局長もニヤッと笑ってみせて、ふいにモニターが切れた。和岐も溜息をつく、モニターのスイッチを切る。

「ピッ、そろそろ議会场の方へ行きませんか、採決の時間です。」

ウィンダムがインジケータを忙しく点滅させてやってくる。キャタピラが少しキーキーいっているのは、油を差し忘れたからだろうか。

「ああ、いま行くよ。それから、資料室からMファイルを持ってきておいてくれ。」

「ピッ、はい、かしこまりました。」

ウィンダムに見送られて、和岐は1つ隣の建物へ向かう。しかし、その足取りも重かった。こうして毎日議会场へ向かいながら何回もう間に合わないと繰り返したことが。こうしている間にもMR-7星が爆発してしまいそうで怖かった。

だが、それでも自分がこの道を行くことが、唯一の方法であることを知っている以上、たとえ間に合わないとしても行かねばならないのだろう。それに今は1人で歩いている訳ではない。目に見えなくとも、心でつながった仲間がいる。

和岐は議会场へ入っていった。中は騒然としていて、誰1人として和岐が議会场に入ってきたことに気付かない。いや気付いた者もいるのだろうが、そういう者達はみんな、わざと気付かない振りをしていた。

議長の合図とともにすべての者はおとなしくなり、壇上に本部局長が上がった。みんなが本部局長の第一声に注目している中、和岐は自分の席につく。

「POWLAの結果をここに提出します。まず1つ目は爆発時期ですが、これは地球標準時間で3日後の11時55分、つまり、あと我々に残された時間は71時間55分しかありません。2つ目は爆発原因ですが、これについてはPOWLAも中々結果を出さず我々も困っていた訳ですが、やっと結果が出ました。原因はMR-7星の4つの惑星による惑星直列です。詳しい説明は省きますが、これによって99.8%MR-7星は爆発します。」

うおお…という地響きとともに、再び議会は喧騒の波に飲み込まれる。誰もがこの結果に恐怖を覚えていた。今、この状況を冷静に眺めているのは、この結果を予め知っていた議長と本部局長、それに連邦委員長の3人しかいなかった。

「静粛に！皆さん静粛に願います。」

議長の怒鳴る声で少しずつ議会が静かになっていく。

「この永世議会も会期の長い物になってしまいましたが、ここいらで採決を取りたいと思うのですが、異議のある者いますか？」

そういつて議長はぐるっと議会場を眺めて、誰も異議を唱えるものがないことを確認する。その年老いた背中で小さく溜息をつく、最後にもう一度確認の意味で連邦委員長の顔を見る。

和岐は議長が振り返って自分を見ていることに気付くと、力強く頷いてみせた。ここまで来てしまったら、逃げては仕方ない。やれることはすべてやってみたのだから。

議長は連邦委員長が頷いたことが意外だったが、隣に座っている本部局長に促されて、採決を取る為に立ち上がった。

「では、異議がないようなので採決を取ります。採決の方法は無記名投票とし、投票用紙にはステーションVRの撤退、キャティ住民の受け入れについての2点を記載することとします。尚、本会は1時間の休会としますので、各自、自由にこの箱へ投票下さい。」

和岐の前にも投票用紙が配られる。和岐は少し考えて、ステーションVRは撤退せず、キャティ住民は地球に受け入れるべきという内容の文章を書くと、議長前に設置された投票箱に用紙を入れる。入れる時、議長と目が合ってしまった。

「君には色々振り回されたが、どうやら間に合ったな。君についても近いうちに必ず決着をつけてやる。」

「私の心配より、キャティの人間をどう助けるか考えられれば、あんたもきっと長生きできたんだけどね。」

「なんだと！」

「連邦委員長、言葉を慎め、採決の結果をここで聞きたければな。」

議長の隣にいた本部局長が、和岐を睨み付ける。

「お2人に言われなくとも、連邦委員長は降りますよ。ただし、MR-7星が爆発するまでは好きにやらせて貰う約束です。では、失礼。」

和岐はわざと丁寧なお辞儀をしてみせ、足早に議会場を出る。こんな所で2人の相手をしているには時間がなさすぎる。今はただ時間だけが惜しいのだ。

プライベートルームに戻った和岐を待っていたものは、惑星キャティに行っている指田少佐からの連絡だった。



「ピッ、委員長、キャティの指田少佐から、緊急連絡が入っています。すぐつながりますか？」

「ああ、つないでくれ。」

ウィンダムという言葉を受け取りながら、自分のデスクにつく。その瞬間デスクのモニターに指田少佐の顔が映る。

「委員長、ようやくソルトリバー教授と会見することができました。しかし…。」

「何か分かったか？」

「あの教授は何も知りません。しかし、猫と会いました。」

「猫…？」

和岐は指田少佐の言葉の意味が分からず、聞き返す。

「シュレーディングーの猫です。もし奇跡が起こるとしたら、この猫に賭けるしかないでしょう。」

「その猫との接触は？」

「いま湯浅中尉にくっついてます。私はこのまま、ギリギリまでキャティに留まるつもりですが…。」

「いや、戻ってきたまえ、ステーションVRの撤退が始まった。もう、今からでは間に合うまい。」

「ギリギリまで私に時間を下さい。これは1つの賭けですが、キャティの住人を1度で全員を助けられるかもしれないんです。」

「何をやる気だ？」

「実験船のキャティを飛ばします。」

「飛ぶのか？」

「やってみなくては分かりません。しかし、私はやってみる価値があると思っています。」

「しかし…。」

しかし、和岐が次の言葉を告げる前に、モニターが切れてしまう。

「ピッ、よろしいのですか？」

ウィンダムが心配気に近づいてくる。手にはお盆に乗った紅茶を持っている。

「仕方あるまい、キャティの住民を助けたいのは私だけじゃないようだからな。既にキャティは私の手を離れて、みんなの物になっているのだから。」

「ピッ、はあ…、私には理解できませんが…。」

ウィンダムは困惑したように、インジケーターを全部消してしまう。

今、心は一つになった。もし、神様がキャティにもいるなら、奇跡を起こしてくれるだろうか？

## 第七章 「みんなの心を一つにまとめて」

# 『心を一つに奇跡を抱いて』 一天高く猫眠る星シリーズ3-